

新しいタイプの農村と 都会の交流を進める

神奈川県小田原食と緑の交流推進協議会
特定非営利活動法人小田原食とみどり





「もうやんなっちゃった!」と思わず弱音が飛び出す。逆に「あともうひとふんばり」と自らを叱咤激励するかのようなつぶやきも聞かれる。なかには田植えよりも、水田から飛び出してくるカエルに関心がありそうな子もいる。

六月初めの日曜日、田園風景が広がる神奈川県小田原市曾我地区のハアールほどの水田で、およそ二十家族七十人ほどの人たちが、この地に古くから伝わる田植え用の定規を使って田植えを行なった。定規に刻まれているしるしを目印に稲を植えていく。しるしのところを植え終わると、定規をうしろにずらし、同じ作業を繰り返す。朝の十時過ぎから十二時ごろまでの二時間ほどかけて作業を終えた。

田植えをしている人たちは、小田原食と緑の交流推進協議会が主催する「たんぼの学校」の初級コースに応募した人たち。水田はここで農業を営む鳥居孝夫さんが提供しているもので、鳥居さんは初級コースの校長でもある。鳥居さんのほかに二人がインストラクターとして指導にあたった。

同協議会は、農業者と消費者が手を結び、「農」を通じて、「環境保全」「地産地消」「食育」、「地域の活性化」などに取り組もうと、





市内の農業者生産者組合である小田原産直組合（ジョイファーム小田原）と県内をエリアとし十四万人の組合員を擁する生活協同組合神奈川ゆめコープなどの四つの団体が、平成十四年四月に立ちあげた団体。昨年の八月には、同協議会の方針に沿って活動を企画・運営する実働部隊としてのNPO法人小田原食とみどりも設立された。

同協議会の事業の一つが、農業体験をしたい人のための、初心者向けの体験型イベントから就農にいたるまでのステップアッププログラム。

最初の体験型イベントには四つの収穫祭が用意されている。その最大のものが五月十五日に開かれたオニオン祭。以前は、ジョイファーム小田原が主催していたが、同協議会の主催に移行した。この日は、県内の生協の組合員を中心とする消費者や市内の農家の人たち総勢五百人ほどが参加。三つの畑で、農家の指導のもと玉ねぎを引き抜き、葉を切り落とし、袋詰めする作業を体験した。

次が初級コース。四月に入學式が開かれ、今回の田植え、そして案山子づくり、炎天下での草取り、稲刈り、十二月の収穫祭と参加者は、家族連れで六、七回、この水田に



足を運ぶことになる。

初級コースを終えた人やある程度農業体験がある人のために用意されているのが「中級コース」や「自主コース」。ここでは、不耕起栽培やコンバインでの脱穀、苗床づくりなどを体験する。そして、週末農業体験「ウィークエンドファーマーコース」へと続く。現在、二家族がこの週末農業体験に挑んでいる。はたけでも、同様に「野菜初級コース」や「中級コース」が設けられている。

この体験交流の活動の仕掛け人の一人で、神奈川ゆめコープの齋藤文子理事長は、水田に來る子どももの成長をこんな風に語っている。「最初は、家族と一緒にたんぼの學校に來て、無邪気に魚をつかんで遊んでいた五歳の子が、次の年には、自らコンバインを操り、さらに次の年には、鎌で稲刈りし、手を休める時は、安全のため鎌をたんぼに刺して置くようになった」と。今回、初級コー





スで、思わず弱音を吐いた大人もカエルに夢中になっていた子どもも、二、三年後には、一人前にコンバインや鎌を扱うようになっていくのだろう。

同協議会のもう一つの大きな事業が、農業者と消費者とが連携しての商品開発。例えば、他の地区の梅におされ、存続の危機にあったという梅。消費者がこの梅を使つての梅干づくりやコンテストを聞くなかで消費者の共感を得て、小田原の十郎梅として蘇った。同様に無農薬のブルーベリーもジャムとして商品化に成功している。

農村と都市との交流といった場合、どうしても農村の人たちが準備万端お膳立てをし、都会の人をお客様としてもてなすというかたちになりがち。同協議会の農業体験や商品開発の試みは、本物の農業者と消費者の関係を創り出しているといえる。

■ 連絡先 NPO法人小田原食とみどり

〒二五〇・〇二〇三 小田原市曾我岸五三一

TEL/FAX〇四六五・四二・五五九八

<http://blog.livedoor.jp/syokutomidori/>

